

## 「二度と再犯しない」と誓った時間を過ごして ～医療観察法病棟における個別 OT の役割・意義～

○逸見 美樹<sup>1)</sup>, 岸 純子<sup>1)</sup> 高岡 崇<sup>2)</sup>

1) 国立病院機構 鳥取医療センター リハビリテーション科,

2) 国立病院機構 賀茂精神医療センター リハビリテーション科

---

**Keywords:** 個別リハビリテーション, 司法精神科作業療法, 医療観察制度

### 【序論】

2005年心身喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察などに関する法律(以下医療観察法)が施行され, 作業療法士は専門的多職種チーム(Multi Disciplinary Team:MDT)の一員としてより複雑なニーズを抱える対象者の治療に参加している。今回, A氏に退院までの半年間, 個別OTを導入し『アクティビティ』と並行し, 対象行為への『受容』『葛藤』『自身への問いかけ』を傾聴する『対話』の両側面に関わった。A氏は「二度と再犯しない」と社会復帰への決意を語るようになり, 司法精神科作業療法での個別OTの意義も踏まえ考察していくこととする。尚, 本報告は本人に説明の上書面にて同意を得ている。

### 【対象と方法】

◇A氏・40代男性・妄想性統合失調症・不安障害◇家族構成: 両親・妹の4人暮らし・弟(別居)◇現病歴: 20代初発(X年)。病的体験・幻聴・不眠あり。X年+12年, 病状不安定による混乱で実母を切りつけ加療3週間の傷害を負わせる(対象行為)◇生活・職歴: 母親から厳しく教育を受け抑圧された幼少期を過ごす。小学時代はトップクラスの成績。中学時代は学業が疎かになりバンド活動に没頭。大学進学し一般就職するが, パチンコにのめり込む等収入に見合った生活は困難。◇認知機能: IQ=全IQ95(鑑定入院時)◇会話: 疎通性良好, 理解力あり◇性格気質: 几帳面・真面目・ルーティーンの行動で安心感を得る。不安が強く「顔のこわばり」として身体症状化し, 些細な事にこだわりストレスを生じやすい。◇鑑定入院を経て当院入院。各治療時期にMDTスタッフを中心としたプログラムを実施。◇退院半年前より個別OTを開始。内容『MDTへの色紙作成』『病室で描きためたイラストの色塗り』『対話』週1回60分(計13回)。

### 【結果】

投薬により精神病症状が安定し, 心理士の内省プログラムで『対象行為』や『自分自身』に向き合った。集団OTプログラムでは苦手な種目や他患者と生じるトラブルを客観的に判断する経験ができ, 最後に個別OTで入院処遇への総括ができた。

半年に渡って個別OTにてA氏と関わりを持ち, 当初は帰住先が決まらない不安から些細なことでもイライラを表出する行動が観察された。筆者は都度, A氏の気持ちを傾聴しつつ, 振り返りを行うことで活動へと意識を向けるよう関わりを続けた。訓練中は希望曲のBGMを流した空間の中で作業を行い, 筆者との対話の中で「母親に申し訳ないことをした。これから家族に迷惑をかけないように適切な距離で生きていきたい」と語れた。また個別OTに対しては「この時間はとても落ち着き, 有意義に過ごせます」と述べ, 退院時にMDTへの色紙1枚と手紙が完成し贈呈できた。

### 【考察】

作業療法士はMDTの一員として自らも対象者や事件と向き合いながら更生・社会復帰に向けて共に歩んでいく。作業を介さない形式的な面接ではなく, 筆者自身も作業をしながら対話する個別OTは安心できる空間であり, 集団OTでは扱うことが難しい対象行為等の機密性が高い内容を傾聴でき, 寄り添うことで適切な治療同盟(二者関係)が形成できた。

対象行為前, 自己中心的だった本人が退院時には『人を想い』『感謝』することができた個別OTの中で「二度と再犯をしない」と誓えたことは, 元々の真面目な優しい人柄(ストレングス)と日々の治療を真剣に積み重ねた3年間の入院生活(時間)がもたらした結果だともいえる。山根は, 「作業療法は, 現実検討の過程で生じる挫折を支える場となり障害を受容する過程を支援する」と述べており, 今回の個別OTでの介入がA氏の障害受容に対して効果的であったのではないかと考える。

犯罪行為は決して許されるものではないが, 適切に治療がなされ退院まで支援し続ける『人間の再出発』に寄り添える作業療法士の責任と役割は大きいと考える。